

<櫻田會通信>

ポーランド便り③「ウクライナ戦争 2 年目のポーランドと日本」

大東文化大学法学部

政治学科教授

武田 知己

2023 年 3 月末、ポーランドに向けて日本を出るときに決意していた事の一つは、ポーランドでウクライナの難民を支援するボランティアに参加しようと言う事であった。私は、福島県出身で、2011 年の東日本大震災以来、ボランティアが如何に被災者のよりどころになるのかを痛感している。自然災害による被災も戦争による被災も区別はない。何か出来ないかいろいろ考えたが、結局実現しないままポーランドを離れなければならない。

振り返ってみると、私はポーランドでウクライナ戦争の転換を目の当たりにしたのだと思う。それは、混乱・熱狂から日常へと言う変化と表現できる。

ワルシャワから国内を旅行する際にしばしば利用したワルシャワ東駅は、今年の 2 月まで、ウクライナからの難民の受け容れの拠点の一つであった。金子泰(かねこ・ひろし)ワルシャワ大学准教授は、次のように言っている。「開戦当時、筆者はワルシャワに滞在しており、ウクライナからの電車が到着するワルシャワ東駅が石の床にそのまま毛布を一枚敷き「生活」を開始した避難民で占められる様子に直面した。駅にはパンと紅茶、コーヒーの無料配布所が急造され、ウクライナのパスポートを提示すれば、無料で携帯電話の SIM カードも得ることができた。東駅前にはノルウェーの NGO の支援により巨大なテントが建てられ、その中で過ごすこともできた」(金子泰「ポーランドにおけるウクライナ人：同国の移民政策との関連から」)。しかし、そのような名残はもう残っていない。



いわゆる支援疲れは、既に 2022 年の夏前には感じられたともいわれている(田口雅弘・金子泰「ポーランド・ウクライナ関係とポーランドのウクライナ難民受け入れの現状」)。しかし、私の来波直後にはまだ熱気があった。例えば、4 月 5 日、ウクライナのゼレンスキー大統領がワルシャワを訪問した。既にワルシャワで一年半を過ごしていた若い友人に誘われて、生でゼレンスキー大統領を見

に行こうと、登場が予定されている 30 分前に王宮広場に行き、登場するだろう場所の前に陣取った。ゼレンスキーはなかなか姿を見せない。真打ちは最後に登場するが如く、一時間近く

遅れて登場した彼を沢山のポーランド人が歓喜の中で出迎えた。隣に居たポーランド人が「歴史的瞬間だったね」と握手を求めてきたのが忘れられない。そのときは、確かに私もそう思った。しかし、それが、私がワルシャワで目にしたウクライナへの共感のピークであった。

一緒にゼレンスキー大統領を見に行ったその友人も、2022年2月の開戦直後のワルシャワは熱気に満ちていたと感慨深げに語る。ワルシャワ東駅だけではなく、ワルシャワ中央駅の待合室も難民たちの宿泊所となったとも知った。多くのポーランド人がウクライナ人を家に泊め「一緒にロシアを呪った」とあるポーランド人から聞いたこともある。ポーランド人も片言のウクライナ語を勉強したりしたというが、両者は同じ語族に属するし、ある年齢以上のポーランド人はロシア語が分かるのでキリル文字が読めればウクライナ語も何とかなるらしい。しかし、4月に訪問した中央駅のその場所には、そうした熱狂の面影はもうなく、ウクライナの人々は町に溶け込み見えなくなった。金子氏によれば、大体120万人位がポーランドの生活に合法的に溶け込んでいるのだというが、10月に開催されたヒューマン・ライツ・ウォッチのシンポジウムでは、諸々合計すると200万人近くになるだろうとのことであった。

8月にはポーランド在住の日本人で熱心に支援活動が続けてきた方の話しを聞く機会があったが、2年目に入り日本人からの支援も極端に減ったといていた。同じ事はポーランド国内でも言えるようである。

それでも10月頃までは、何かボランティアを募集している団体がないか、知り合いになったポーランド人に探してもらっていた。しかし、言葉の壁があった。ウクライナ語とポーランド語が出来ないと役に立たない。開戦当初のようなゴタゴタで日本人の手でも借りたいというような雰囲気は、もう見当たらなかった。それでも例えばウクライナに入って現地を見る方法はないだろうか。一緒に搬入を手伝うとか？しかし、個人でウクライナまで行くのは夏頃までの段階では難しそうであった。外務省のウェブサイトでは警戒レベルは4である。VISAが下りるとは思えなかった。



せめてウクライナの国境近くには行きたいと思い、6月17日に、プシェミシルまで行ってみた事があった。プシェミシルという町の名前は、2023年年3月の岸田首相のウクライナ電撃訪問の時にポーランドからキーフ入りしたときの拠点として知っていた。そこからキーウ行きの列車が今も頻繁に出ているという。スタレツカ先生に教えていただき、まずはルブリンまで電車で行き、一泊して見物した。ルブリ

ンのバスターミナルにはまだたくさんのウクライナ人が本国との間を行き来しているようであった。そのあと、ビウゴライまでバスで行き、そこで乗り継いでプシェミシルのバスターミナル

に着いた(写真はルブリンキーウ間を行き来するバス。ウクライナ人はタダであった。2023年6月17日筆者撮影)。

まずは宿に向かった。宿の大家はウクライナ人だった。ウクライナ語、ロシア語、ほんの少しのポーランド語しかできず、私たちはほとんど話が出来なかったが、おまえは中国人か韓国人かと言われたのだけ分かって、日本人だと答えると、途端に笑顔になった。よく分からないが、何かで日本のことを褒めているのだけ理解できた。

せっかくなので宿を出て列車の駅に向かった(写真はプシェミシル駅。2023年6月18日筆者撮影)。駅にはくまだウクライナ人向けの窓口があった。そこで水や食料ももらえるようであった。オックスファムのビブスを来たボランティアが働いていた。そこから先の駅の待合室にはウクライナ人が20人ほどいたのが見える。大きな荷物を持って、あまりきれいでない服を着ている。避難民かも知れない。入り口にはポーランドの陸軍の制服を着た、私よりも頭一つ大きな軍人が二人いて、チケットとパスポートの検査をしている。私はチケットがないので入れなかった。反対側の通路にも数人のウクライナ避難民らしき人が見える。プシェミシルの町で見かけたウクライナ人避難民らしき人々はそのくらいだった。

宿に着き、大家と片言で話したら、彼の知り合いのウクライナ人はワルシャワやクラクフに行っているらしい。多分働き口を求めての事だろう。

なるほど。ウクライナからの避難民は、もうポーランドに定住する道を選択しつつあり、働き口を探して都会に向かっているのだ、と思ったが、後で聞いてみると、もう都会には職がないそうで、2023年現在、ウクライナ避難民は内陸部に職を得て定住しているのだという。

翌日はもう一つの都市ジェシュフを訪れた。ジェシュフは、戦争勃発後、ウクライナ支援のハブとなっていることで有名な空港である。この町はプシェミシルと違い夜まで随分活気があった。町の中心部のドミトリーに泊まったので、広場周辺の飲み屋からアメリカ兵が話す英語が部屋まで聞こえてくる。夜、パブで隣に座ったアメリカ人に話しかけたが、相手にされなかった。多分自分の英語の問題だろうが、ポーランド人でもない、怪しげなアジア人を警戒したのかも知れない。若干荒くれた感じの若者の集団だったが、アメリカ人(の恐らく兵隊)が基地を出て町で飲み歩いている事だけ感じてワルシャワに戻った。成果がなかったとも言えるが、在外研究時には、こういったダメ元の視察も意味がないとは言えない。もはや何の混乱も熱気も感じる事はなかったことは十分に分かったからである。



ところで、在外研究では比較的時間ががあるので、日本ではなかなか見る暇のない英語版のロシアのニュースやインドのニュースまで目を通すことができる。翻訳ソフトを使えば、ポーランド語のニュースだってその概略をつかむ事は可能だ。そういう多元的なソースからニュースを拾う事で、プシェシル行きまでに否応なく気が付かざるを得なかったのは、ウクライナは、ロシアとの戦争で、実は劣勢にあるのではないかと言う事であった。私が出国する今年の4月ごろまで、日本では今にもロシアが負けるような報道が続いていた。6月8日頃から始まった反転攻勢が思ったほど進んでいないことは、戦争研究所(ISW)や戦略国際問題研究所(CSIS)以外のニュースを読むとすぐに気が付いた。このころから日本でもそれまでとは異なる見方が少しずつ浸透し始めたように思われるが、そもそも、2023年5月のG7広島サミットの会合にゼレンスキー大統領が劇的に参加したのも、裏返せば、それだけのアピールをし、武器支援を訴えなければ到底戦えなかったと言う事である。夏以降も兎に角武器支援を絶やさぬよう国際社会に様々な機会を通じて訴えてきたことは記憶に新しい所である。

2023年6月7日のカホフカダムの爆破のニュースは私には衝撃的だった。あるシンポジウムで登壇したこちらのウクライナ研究の専門家が、果たしてどちらがダムを破壊したかはまだ分からないので反転攻勢を仕掛けるウクライナが秘密裏に爆破した可能性を排除しない方がよいと言っていたのを思い出す。しかも、このダム爆破でロシアの優勢が大きくは変化しなかった。この原稿をまとめはじめたのは10月頃であったが、それ以降も戦局展開は見られず、11月になると、ウクライナ軍関係者も「新段階」への移行——つまり、戦局が思うように展開できていない事——を認めるようになった。そして、世界の関心は、10月7日に始まったガザ戦争にもはや完全に移っていると言う状況である。

こうした状況では、西側にとっても不本意なかたちでウクライナ戦争が終結する可能性を考えざるを得ない。だが、ロシアがウクライナに侵攻後、はじめて国会議員として訪口した鈴木宗男議員の行動や発言が強い非難を浴びたように、ロシアが勝つ可能性を考え、行動を準備する事は今現在も勇気がいる事である。それにもかかわらず、11月から12月にかけてのゼレンスキー大統領の各国訪問、特にEUとアメリカへの訪問の成果が余りにも乏しい現実を前に、世界は否応なくウクライナ戦争の終盤を見据えて動かざるを得ない様に思える。日本以上に反ロシア感情が強いポーランドのような国にいと、この戦争でロシアに勝利して貰いたいというような声を聞く事は全くない。しかし、そんな国だからこそ、ロシアの力を侮ってはいないようである。ロシアの強さを知っているこの国の人たちは、だからこそ懸命に支援を続けてきたのだが、有り体に言って、ウクライナは西側から1500億ドル以上(2023年2月現在)の巨大な支援を受けなければ戦闘を継続できない弱国なのである。統計を見ると、8-10月の各国からのウクライナ支援額は20億ドルほどであるが、前年比でいうと何と87%減だった。その丁度半ば頃の9月20日、ポーランド政府は、ウクライナへの武器支援を停止すると声明した衝撃は世界的に大きかった。ウクライナを守る事は自国を守る事として率先して援助をしてきたポーランドの変化は、この戦争にはウクライナの完全勝利はあり得ないという私の漠然とし

た感覚を決定的にしたものであった。

勿論、2023年12月の現段階でさえ、この戦争がどう終結するかは分からないと言うほかないし、この戦争がどのように終わろうとも、ロシアが起こした侵略戦争であるという事実は変わらない。前述のヒューマン・ライツ・ウォッチのシンポジウムでは、リトアニア・ウクライナ・ポーランドの国際法学者や政治家達が、周到にロシアの戦争犯罪(子供の連れ去り)の提訴を準備した事を知って感銘を受けた。停戦しようとも、戦争犯罪者として追求されることは間違いない。その意味では、ロシアにとっても完全勝利はないのであろう。

※2022年3月にウクライナは当事者として国際司法裁判所(ICJ)に提訴を検討したが、国際刑事裁判所(ICC)には加盟しておらず、2023年3月予審裁判部が2023年3月にプーチン大統領とリボワベロワ大統領全権代表への逮捕状を発行した際には、リトアニア・ポーランドの水面下のイニシアティブが功を奏した由。

最後に、誤解のないように強調しておきたいのは、ウクライナはこの戦争に何としても勝たねばならないということは、今も変わらず多くのポーランド人が感じていることだということである。日本ではヨーロッパにおける足並みの乱れというようなことが時折言われるが、ウクライナ支援の最前線にいるポーランドの世論の基軸は何も変わっていない。12月に行われたワルシャワ大学の中東欧諸国に関するシンポジウムでも、「ロシアはもはやヨーロッパではない、かれらと私たちは到底「我々」とは呼べない」と熱く語るポーランド人研究者がいたくらいである。締めくくりに当たって言いたいのは、混乱が収まり、熱が失われたこの状況で、ポーランドもこの戦争に如何に決着を付けるかという難しい判断をし始めている、ということである。ロシアを知り尽くしているポーランドは冷静なリアリストでもある。

日本も、2024年に日ウクライナ経済復興推進会議を開催し、ウクライナの復興支援をすでに方針として決めている。戦後を視野に入れ始めたのだ。果たして復興にどの程度予算を割くのか、それを21世紀の日本外交の大戦略とどのように結びつけていくのか。ポーランドを離れても、一人に日本人として、またポーランドに滞在してささやかながら見聞を広めた者として、この状況を注視していきたい。

金子泰「ポーランドにおけるウクライナ人：同国の移民政策との関連から」『ユーラシア研究』(67) 2023年3月

田口雅弘・金子泰「ポーランド・ウクライナ関係とポーランドのウクライナ難民受け入れの現状」『ロシア・ユーラシアの社会』(1064)、2022年9月

“The War in Ukraine: The Human Rights Toll and Kyiv’s Future,” Human Rights and a Just Society The 15th Symposium, October 16th-17th 2023, Department of Political Science and International Studies, University of Warsaw.

“Re-writing Cultural Geography: Toward a New Meaning of Eastern Europe,” December 8-10, 2023, Faculty of Philosophy, University of Warsaw

永福誠也「ロシアによるウクライナ侵略と国際裁判所 ——ICJ への訴訟提起と ICC によるプーチン大統領の逮捕状発付に係る問題」『NIDS コメンタリー』265 号、2023 年 7 月

Institute for the Study of War のウェブサイト、

<https://www.understandingwar.org/>

「特集 ウクライナ戦争——世界の視点から」『アステイオン』97、2022 年 11 月

森本敏・秋田浩之編『ウクライナ戦争と激変する国際秩序』並木書房、2022 年

佐藤優・手嶋龍一『ウクライナ戦争の嘘』中公新書ラクレ、2023 年

なお、金子泰氏にはお話を伺いし、ご論考をご提供いただいた。記して感謝申し上げます。